

サテライト・キャンパスを活用した大学と地域の連携可能性について  
——岡山大学・西川アゴラを拠点としたまちづくりの展開——

Collaboration between University and  
Community through the Satellite Campus  
— Civic engagement in Okayama University's Nishigawa AGORA

岩淵泰・前田芳男・石田尚昭  
IWABUCHI, Yasushi・MAEDA, Yoshio・ISHIDA, Naoakai

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第46号 2018年11月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.46 2018

# サテライト・キャンパスを活用した大学と地域の連携可能性について ——岡山大学・西川アゴラを拠点としたまちづくりの展開——

岩淵泰\* 前田芳男\*\* 石田尚昭\*\*\*

## 目次

1. はじめに
2. サテライト・キャンパス設置の背景と「西川アゴラ」の開設
3. 西川アゴラの活動内容
4. サテライト・キャンパスを活用した大学・地域協働の課題と展望
5. おわりに

## 1 はじめに

本稿は、大学と地域による協働のまちづくり事例として、岡山大学地域総合研究センターが運営するサテライト・キャンパス「西川アゴラ」を取り上げる。西川アゴラは、岡山市中心市街地に位置する西川緑道公園沿いの事務所ビルの一室を大学が賃借し、そこを大学生や教員、行政、まちづくり市民団体等が、授業、勉強会、シンポジウム、イベント準備や調査、情報交換の場等として利用しているものである。管理には常駐・専属の職員は置かず、岡山大学地域総合研究センター教員と公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団職員が、随時当たっている。平成26年の開設当初は、「中心市街地に若者の集まる場が欲しい」という声の下に設置されたが、現在は、大学生のサービス・ラーニングの場としての役割も大きくなっている。

本稿では、まず岡山市のまちなかにサテライト・キャンパスが設置された背景について概観し、次にその活動内容や、西川アゴラで行われたユニークな教育事例を紹介する。最後に、西川アゴラの事例から、サテライト・キャンパスを活用した大学・地域連携の課題と展望を考察したい。

## 2 サテライト・キャンパス設置の背景と「西川アゴラ」の開設

### 2-1 大学・地域連携が進んだ背景

サテライト・キャンパスとは、大学のメインキャンパスから離れ、中心市街地や郊外地区に設置された大学教員や学生たちの活動拠点である。その設置目的には、大学の持つ研究・教育活動の

\* 岡山大学地域総合研究センター助教

\*\* 岡山大学地域総合研究センター教授

\*\*\* 岡山大学地域総合研究センター 客員研究員、公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団常務理事

PR、市民向け公開授業の実施、サービス・ラーニングの現地拠点、市民協働のための共有スペース、人が集まることによる地域活性化などが挙げられる。学生だけでなく市民の利用も認めているところが多く、オープンに使える場としても活用されており、全国に広がりを見せている。

そこで、まず大学・地域連携の機運が高まった経緯を概観したい。その背景には、大学改革や地方創生など国レベルの政策が深く関係している。平成18年12月の教育基本法改正、翌年6月の学校教育基本法の改正を経て、大学が従来の研究と教育だけではなく社会貢献することの重要性が高まっていき、まちづくりに資する地域の資産として大きな期待が大学に寄せられるようになる。平成24年には、文部科学省から「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」が出され、同年、総務省の「域学連携」地域づくり活動が始まり、翌平成25年、文科省は「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）を発表する。平成26年「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の閣議決定に続き、平成27年、COCが「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」事業へと発展していくと、地方創生が、大学と地域の共通したテーマとして位置づけられていく。COC事業が地域再生を担う人材育成であるのに対し、COC+は、東京一極集中に対して、若者の地元への定着や就職に重きを置くという違いこそあれ、その本質は、大学の研究と教育を社会貢献に結びつけていくということである。

## 2-2 大学・地域連携の進展の中で顕在化した問題

以上のような地方創生と大学改革の展開を受けて、各地の大学では、①地域志向型の人材育成や課題解決型の学習プログラムの開発、②サテライト・キャンパスの運営、③COCやCOC+に代表される政府や地方自治体との連携が進められているのだが、大学と地域の急激な結びつきは、まちづくりの現場での混乱も生み出している。

たとえば、大学が地域の実情にそぐわない机上のプログラムを作成してしまったために地域に必要な交流を押し付けてしまうことや、地域の人々や学生の成長を考えることを二の次にして使いやすいボランティアとして動員をかけるといった危険性も否定できなくなっている。まちづくりの裏側で、大学と地域で意見の食い違いがあるならば、地方創生を確かなものにするためにも、地域連携の評価がなされるべきである。すなわち、大学はまちづくりに本当に貢献し、持続的な互惠関係を構築できているのかという視点から、大学と地域の連携成果を問うべきなのである。

本稿では、上記のような問いを持ちながら、サテライト・キャンパスを活用した大学・地域連携の可能性を検討していくが、ここで、大学と地域による協働のまちづくりに関する先行研究を整理しておきたい。まず、サテライト・キャンパスの実践的な研究事例の蓄積を発表するものとして、新潟で行われているサテライト・キャンパスサミットが挙げられる。これは、新潟青陵大学、新潟青陵短期大学、新潟薬科大学、長岡造形大学が設置した「4大学メディアキャンパス」が中心となり、全国のサテライト・キャンパスに参集を呼びかけ、情報共有を進めるものである。平成27年か

ら年一回開催されている。サテライト・キャンパスサミットのユニークな点は、研究重視の大学キャンパスが地域と縁遠い「要塞や秘密基地」となることを危惧し、大学が市民交流を軸とした知の拠点になるための実践事例を、当事者である教員や学生、地域の関係者が発表・共有し、その成果を広く発信していることである。

その他、国内外の事例をまとめたものとして、小林と大学連携まちづくり研究会による『地域と大学の共創まちづくり』が挙げられる。共創のまちづくりが意味することは、市民、大学、地域が主体となり多様な価値観が反映される合意形成であり、この研究では大学を巻き込んだ都市デザインに踏み込んでいる。伊藤・大歳・小松編の『大学地域論のフロンティア』では、東北公益文化大学による「大学まちづくり」を挙げている。大学まちづくりは、大学と地域が相互に貢献し合うまちづくりであるが、彼らは、大学の研究と教育が、地域の持つ文化・伝統・環境に相互に影響し合う点に注目している。大西・竹内・佐藤編の『地域と連携する大学教育の挑戦』では、愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースを通じた地方国立大学における地域連携の具体例が紹介されている。

中塚と小田切の「大学地域連携の実態と課題」には特に注目したい。この論文では、全国各地で「地域の不満・大学の不安」という状況が生まれていると指摘する。地域側は、大学から地域課題に対して直接的な解決策が提示されないことについて不満があり、大学は、地域からの一方的な要望に応えると研究や教育の自主性が奪われるという不安を抱く。その一因は、双方のコミュニケーションの不足によるものであるが、大学と地域の連携には、従来の産学連携型ではなく、大学特有の「若者の拠点」を活かした新しい連携に広がっていかとも指摘している。教員と学生が主体となる新しい地域連携には、①交流型、②価値発見型、③課題解決実践型、④知識共有型の4タイプがあり、そのいずれの連携においても大学と地域の密なコミュニケーションが不可欠であるとする。

中塚と小田切の分析を踏まえると、本稿で取り上げる西川アゴラは、①から④までのタイプが折り重なりながら運営されているといえる。なぜならば、西川アゴラのような小さなサテライト・キャンパスは、地域のニーズも集まりやすく、その分、交流する相手とも柔軟に対応しなければならないからである。また、地域総合研究センターは、岡山市のまちづくり調査を受託したり、まちづくり市民活動に実行委員などの立場で直接関わったりすることで、市民と一緒にまちの価値や課題を発見し、知識を共有する現場に身を置くことができている。後述する学生による調査・提言活動は、課題解決の実践である。とはいえ、西川アゴラが先述のような「地域の不満・大学の不安」問題と無縁であるわけではない。

以下、大学と地域の協働のまちづくりは持続的に展開できるのか、という問いを持ちながら西川アゴラの運営を分析する。

## 2-3 西川アゴラの設置経緯

### (1) 西川緑道公園の建設及びまちづくり

西川緑道公園では、「岡山市西川パフォーマー事業」を通じて年間50ほどのイベントが開催されており、まちなかの魅力向上、歩いて楽しい空間づくりが進められている。西川緑道公園は、岡山市中心部にあり、農業用水である西川の両側2.4kmに渡って南北に続く都市公園である。新幹線の駅からわずか数百メートルの場所に、アユやウナギ、希少種のタナゴなど30種を超える魚類が生息し、夏にはホタルを見ることができると、都心にありながら豊かな自然に恵まれ、岡山市民の憩いの空間として親しまれている。

西川緑道公園は、歴史的に見ると、およそ400年前の慶長年間に現在の位置に農業用水として整備され、その水は城下の人々の生活にも利用されてきた。しかしながら、戦災から高度成長期を経て昭和40年代になると、西川は、ゴミの投棄や生活排水の流入で、どぶ川の様相を呈していた。西川を暗渠にして道路や駐車場にする計画も出ていたが、岡崎平夫市長（在職：1963年～1983年）は、「緑と花 光と水のまちづくり」を都市づくりの基本理念とし、昭和49年から8年をかけ、西川沿いの道路を1車線廃止し生み出したスペースに公園を完成させる。地域の人々は、用水の環境美化活動に取り組み、経済界の若手メンバーが歩行者天国を開催するなど、西川を憩いの空間として復活させるまちづくり運動が行われていく。昭和60年代から平成10年にかけて、若手建築家25人が「チーム25」というまちづくり団体を結成し、その活動の拠点として西川緑道公園沿いのビルの一角に「ギャラリー25」を設置した。彼らは、まちづくりのシンポジウムを開催するとともに、「西川フリーマーケット」を10年間続け、西川緑道公園における市民活動の文化を根付かせようとした。

21世紀に入ると、岡山市中心市街地は、少子化に伴う小学校の統廃合、土地利用における平面駐車場の増加が顕著になり、まちの賑わいや活気が失われていった。そこで岡山市は、平成21年から「西川パフォーマー事業」を始め、市民によるイベント開催を後押しすることで、中心市街地の活性化を目指すことにした。

### (2) 西川アゴラの設置

岡山市が、西川パフォーマー事業の開始から2年が経過したのを機に、西川緑道公園に若者が集まっているのかを確認するためにフォーラムを開催したことがあった。岡山市は、西川緑道公園ではまちづくりの機運が高まり、まちづくりへの若者の参画が進んでいると考えていたが、実際にはシンポジウムに参加した70名の大学生の中で西川パフォーマー事業に参加していたのはわずかに1名であった。この状況を踏まえ、岡山市は、若者との積極的な接点を持つため、岡山大学地域総合研究センターに、学生が参加することを要件とした西川緑道公園界隈のまちづくり調査を委託した。調査のアルバイトという形であっても、若者が西川に接し、まちづくりに参画する機会をつくらうとしたのである。委託の条件には、調査への一定数以上の学生の参加と、まちづくり学習の実施が

明示されており、これにより延べ300人近い学生が西川を訪れることになった。この学生の中から、「市と大学は、西川緑道公園界隈の活性化のためにまちづくり拠点を持つことが不可欠である」という提案がなされ、そのための事務所を探すことになった。幸運であったのは、学生たちも調査員として参加した、30人以上の市民への聞き取り調査の過程でビルオーナーと接する機会があり、上記の主旨に賛同し物件を紹介してもらえたことである。

平成26年10月、岡山市と大学の間で「国立大学法人岡山大学と岡山市とのまちづくりに関わる地域連携協定」が締結され、西川緑道公園に面するオフィスビルの2階に「西川アゴラ」を設置することになった。西川アゴラは、床面積約45 m<sup>2</sup>で、10人掛けの大テーブルが一つと4人掛けの丸テーブルが2つあり、補助イスを使っても約30人を収容すれば一杯になってしまう規模である。

図表1 西川アゴラでの勉強会の様子



### (3) 西川アゴラの運営

従来、大学による行政や地域への参画は、概して委員会や審議会が中心であったが、西川アゴラでは、大学教員が、市民、行政と協働し、まちづくり活動の支援に力を入れている。運営においては、以下の点を重視している。

- ①学生がまちづくりの調査に参加することで、地域を知ること
- ②サテライト・キャンパスとして、大学とまちの結節点になること
- ③まちづくりの情報を発信し、地域のイノベーションを起こすこと
- ④市民がまちづくりのホットテーマに参画する場であること

西川アゴラの設置経緯からして、その活動は、市民協働がキーポイントになっている。図表3に示すように、当時、岡山市の「西川パフォーマー事業」を通じて、西川緑道公園界隈に女性や若者の活動が集まりはじめていたのであるが、行政が直接事業として賑わい創出イベントをするのではなく、市民団体の活動を幅広く支援・促進する方式をとり、現場の直近に位置する西川アゴラが、文字通り諸団体の結節点として機能したのである。

西川アゴラの利用条件は、まちづくりに貢献する活動を行うことである。その内容は、勉強会、会議やイベントの準備など、さまざまである。平成29年1月～12月の稼働日数は165日（平日の夕方と土日が多い）であり、延べ利用者は約2,000名であった。施設の管理は、地域総合研究センター教員と公益財団法人岡山市スポーツ文化振興財団が当たっている。同財団は、西川アゴラと同じビルの上階に入居し、西川緑道公園界隈のまちづくりで地域総合研究センターと連携している。利用にあたり、希望者は、岡山大学地域総合研究センターに申請し、使用目的に合致すれば無料で利用できる。可能な限り自由に使えるようにしているが、管理者に施設や清掃などの負担がかかることや、マナー違反も少なからずあり、それが開設以来の課題ともなっている。家賃や水光熱費等の経費は、地域総合研究センターが岡山市から受託した調査費の一部を充当している。

### 3 西川アゴラの利用事例

#### 3-1 まちづくり活動に関する利用

西川アゴラの開設当初は、「ポートランド・まちづくりウィーク」と称し、米国ポートランド州立大学の研究者を招きシビック・エンゲイジメントに関する講義やワークショップを開催した。また、地域総合研究センター教員も彼の地を訪ね、その調査・研究結果を報告するなど、公共交通や公共空間の整備された住みやすい都市づくりや、それを推進する市民協働のあり方を学習した。以来、様々な学習の場としての活用は、西川アゴラの柱となっている。以下、西川アゴラの利用事例を示す。

図表2 西川アゴラの利用事例

種類	利用事例
研究会・講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おかやまスポーツプロモーション（SPOC）研究会</li> <li>・環境省「エコ・リバブル」研究事業講座</li> <li>・都市計画学会支部研究会</li> <li>・日本技術士会支部研究会</li> <li>・マチナカゼミ</li> </ul>
授業（岡山大学）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学とまちづくり（満月バー等の活動への参画）</li> <li>・フィールド調査の基礎を学ぶ（交通量調査等）</li> <li>・行動科学 I（医学部生による専門以外の職場の体験）</li> <li>・岡山まちづくり論（西川のまちづくりの歴史調査など）</li> </ul>
大学関係者の利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育学研究科音楽研究会</li> <li>・岡山大学若手職員塾</li> <li>・新見市環境保全型森林ボランティア報告会</li> <li>・大学生まちづくりサークルの活動の打ち合わせ</li> </ul>
市民グループの会合、作業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種実行委員会の会合 (満月BAR、ホコテン、キャンドル・ナイト、だっぴ、いち、備中間き書き 等)</li> <li>・NPO主催のセミナー、定例会</li> </ul>
イベント備品の一時保管	<ul style="list-style-type: none"> <li>・満月BARや有機生活マーケット「いち」で使用するテーブル、イス、リユース食器など</li> <li>・岡山市スポーツ・文化振興財団が保有する楽器や機材など</li> </ul>

行政機関の打合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化を活かすまちづくり会議</li> <li>・文化創造事業検討会議</li> <li>・岡山市インターンシップ研修</li> <li>・岡山市「大学生まちづくりチャレンジ事業」キックオフ会議及び成果報告会</li> <li>・県庁通りまちづくりセミナー、ワークショップ</li> <li>・岡山市民マラソン協働事業会議</li> <li>・(公財)岡山市スポーツ・文化振興財団の会議、作業</li> </ul>
中心市街地における各種調査の拠点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・景観調査</li> <li>・歩行者天国来街者への聞き取り調査</li> <li>・イベント時及び平日の通行量調査</li> <li>・沿道のビルのテナント（床利用実態）調査</li> </ul>
視察・取材対応	他府県からのまちづくり団体、大学の視察団への説明など

西川緑道公園界隈で行われる、市民団体主導のまちづくり活動には以下のようなものがあり、これらの活動に必要な資材の一時保管、イベントの準備作業、会合の場として西川アゴラが利用されている。これ以外にも、子ども向け自然体験ワークショップ（魚とりや木登り）、年間数十回に及ぶ音楽やダンスのミニライブなどが行われており、希望があれば調整し西川アゴラを開放している。

図表3 西川アゴラを活用する代表的な市民活動の例

活動名	内容
満月BAR	春から秋の終わりにかけて、満月が出る日に最も近い週の土曜日に開催される飲食イベント。公園内に立ち飲み式の簡易なテーブルが設置され、知らない人同士が相席になる。運営主体は、20代の若者、女性を中心とする実行委員会であり、西川アゴラにテーブルやテントなどが置かれている。
有機生活マーケット「いち」	「いち」は、毎月第3日曜日に開催。20～30の出店があり、地元で採れた有機野菜、農産加工品、パンやケーキ、雑貨などが販売され、ピザ、カレーといった軽食が楽しめる。
岡山市による中心市街地回遊性向上社会実験	岡山市は、県庁通りの1車線化に向けた検討を始めており、通常2車線の道路を1車線化し、生み出したスペースに歩道と自転車レーンを設置した際の渋滞発生の有無、歩行や走行の安全性を検証した。岡山大学がこの調査を支援している。
ホコテン！	ホコテンは、歩行者天国を指しており、平成26年度から岡山市の回遊性向上社会実験として始まったが、平成28年度から市民団体が企画・運営する体制に移行した。日曜日の午前11時から午後4時まで開催し、飲食ブースのほか、青空図書館、デッキチェアを設置している。
キャンドル・ナイト	NPO法人タブラサが、5月の連休に、西川緑道公園をロウソクの灯りで照らすイベント。ロウソクは、結婚式で使われたものを再利用しており、若い女性を中心となって企画・運営している。

西川アゴラは、若手建築家集団である「チーム25」が開設した「ギャラリー25」以来、二度目のまちづくり拠点の開設である。前者は専門性の高いまちづくり集団がリードしたものであったが、後者は、市民、行政、大学の様々な主体の協働体と言える。西川アゴラは、外形的には岡山大学のサテライト・キャンパスであるが、大学の教育目的だけでなく、市民団体の自由なまちづくりサロンとしての性格を持ち合わせており、これまでの運営を通して、まちづくりの連携拠点の重要性を確信してきたところである。

### 3-2 岡山大学実践型社会連携教育

#### (1) まちづくりを通じた教育の可能性

岡山大学では、平成28年度より「実践型社会連携教育」の全学展開を始めている。これは、いわゆるPBL (Problem-based Learning/Project-based Learning) あるいはCBL (Community-based Learning) と言われるもので、学生が地域の様々な現場に出向き、社会の課題に向き合いながら学修するものである。これに先立って、岡山大学地域総合研究センターでは、平成24年から学生が人や車の通行量調査や回遊性調査を続けているほか、西川緑道公園界隈での市民への聞き取り調査「西川ヒアリング」行っており、生活、遊び、魅力、環境、歴史などの観点で多様な世代からの情報を収集・蓄積してきた。

西川緑道公園でこうした教育プログラムが作成・実施されているのは、学校が提供する教育と、地域の実践から学べる教育の双方から学生たちを指導できるからである。既に、西川緑道公園界隈では、まちづくり団体のネットワークや環境学習の場が構築されており、教育機関は様々な団体の支援を受けやすくなっている。

以下で紹介する二つの授業は、西川アゴラを拠点としたまちづくり教育の一例である。

#### (2) 「岡山まちづくり論」

教養教育科目「岡山まちづくり論」という授業の開発には、地域総合研究センターが集めたまちづくり資料の蓄積が関わっている。西川アゴラの誕生前から、岡山大学地域総合研究センターは、西川界隈の市民活動史を聞き取り調査でまとめていく西川ヒアリングを行ってきた。学生たちは30名以上の聞き取りを行っていき、西川緑道公園の誕生に関わった市役所職員だけではなく、平成27年には公園の設計を担当した伊藤邦衛氏 (1924~2016) にも聞き取り調査を行っている。伊藤氏は、東京の江戸川公園や昭和記念公園、そして、宇都宮市の釜川造園修景など、全国の公園づくりに携わってきた造園家である。伊藤氏の造園哲学には、公園を鑑賞するだけでなく、「用と美」を追求することで、歩きたくなる公園を目指している点が特徴として挙げられる。西川緑道公園で多くのイベントが開催されているのも、伊藤氏が設計の段階から公園に市民が集まる広場のイメージを反映させてきたことの影響が大きい。また、伊藤氏自身も、市民が使いながら変化する公園として西川

緑道公園をデザインしたと語っている (2015年12月25日の西川ヒアリングにて)。

地域総合研究センターは、平成27年に公益財団法人東京都公園協会から伊藤氏が残した岡山県の資料を一時借り受け、整理を行ってきた。その中には、伊藤氏の公園スケッチの他、台帳やチーム25が作成した西川まちづくり憲章の素案なども含まれており、岡山市の市民活動を分析するうえで貴重な資料が保存されている。地域総合研究センターでは、これらの資料を活用した授業を開発することで、西川緑道公園の成り立ちと特徴を明らかにし、まちづくりに貢献しようとした。

教養教育科目「岡山まちづくり論 (1) (2)」では、ポートランド州立大学のCAPSTONEプログラムが地域の歴史遺産ガイドブックを作成していたのを参考にして、各クラスで15名を定員として、フィールドワーク重視の授業を行った。そして、西川緑道公園の魅力を広くPRするために、西川界隈のまち歩きマップの作成を進めていった。具体的には、「岡山まちづくり論 (1)」では、伊藤氏が残した写真を利用して、伊藤氏が公園内のどの位置やアングルから撮影したかを分析することで、公園の造形的な特色を明らかにすることにした。続けて、「岡山まちづくり論 (2)」では、岡山市大学生まちづくりチャレンジ事業を申請し、25万円の活動費を得て、西川まち歩きマップの作成に取り掛かることになった。

図表4 西川まち歩きマップ『西川のすゝめ』



岡山まちづくり論では、大学内での西川緑道公園の新聞記事を分析した後、西川アゴラを拠点としてフィールドワークを行った。「岡山まちづくり論 (1)」の学生たちは、西川界隈のまちづくりに関わる元岡山市職員から、西川パフォーマー事業、イベント空間の変遷、魚や木の種類、雁木跡、岡山大空襲跡、西川の生活について説明を受けながら、写真の位置を捜していった。この作業で明らかになったのは、石の組立、社、パーゴラ (植物のつるを絡ませる棚) の写真や、同じ位置から撮影された写真が多いことであった。更に、伊藤氏が、用水べりに近づき腰を落として撮影していることなど、学生たちは、公園の違った見方や楽しみ方を体験することができた。続けて、「岡山まちづくり論 (2)」では、まち歩きマップの作成のために、西川沿いのホテル、商店主、まちづくり団体などへの聞き取り調査、マップの構成、デザインなど綿密な作業が必要となったため、マッ

プの作成時間は授業だけではならず、授業の合間に追加のフィールドワークも必要になった。

マップは、1000部作成し、西川沿いの店舗に配布したが、学生ならではの柔らかいタッチによる西川緑道公園のマップ作製は、学生自身が西川緑道公園に対する理解を深め、また、まちづくりに貢献する実践的な授業を行うことになった。

### (3) 「フィールド調査の基礎を学ぶ」

これは、主として1年次生を対象にしており、高年次の学修やレポート作成に役立つスキルや、調査を通して社会を観察する力を養うことができる。小さな調査とレポート作成を丁寧に行うところに特徴がある。調査課題とフィールドは、キャンパス内の駐輪マナー、タバコの吸い殻のポイ捨て実態、大学周辺の空地農園の作目の種類など様々で、西川のフィールドでは、平常時の通過交通量や沿道ビルの入居テナント（床利用調査）を調査した（平成27年度）。

岡山大学地域総合研究センターでは、先述のとおり、岡山市との協定に基づいてイベント時の来場者通行量調査等を学生のアルバイトを動員して行っていたが、単に調査作業をするだけは地域の理解も深まらず、教育効果も薄い。そこで、学生が独自に調査テーマを設定し、調査の企画からデータ分析・加工、成果発表まで通して体験できるよう一連の授業を組み立てた。

通過交通量調査は、「西川ホコテン！」区間（一方通行規制）の市道の2地点において、通過する自動車のナンバーを記録し、それを突き合わせることで、①当該区間を通過した車両、②区間内に侵入したが途中の路地から外に出た車両、③途中の路地から区間に侵入し通過した車両を計測するものであった。歩行者天国区間の周辺エリアは一方通行規制が多い街路網となっていることから、平常時に当該区間を通過するだけの車両は、歩行者天国開催時は迂回路を通れば済むが、当該区間から路地に入る車両は、迂回路の設定ができない場合もある。そのために、特に上記②の割合を知ることは、歩行者天国が自動車交通に与える影響を評価する上で重要である。受講学生は、こうした考え方を学ぶとともに、表計算ソフトを用いてナンバーのマッチングをする方法を自ら工夫した。

ビルの床利用調査は、西川緑道公園界隈のビルに入居しているテナントの名前と業種を階ごとに調べるものである。西川緑道公園界隈は、満月BAR歩行者天国といったイベントが定着するに伴い、商業地としてのポテンシャルが高まり、飲食店を中心に新たな出店が見られるようになってきた。空き家がりリニューアルされ、平面駐車場だった場所にビルが建つといったまちの変化を実感するには、一軒一軒のビルのテナントを現地で確かめ、それを地図に落とす地道な作業を自ら行うのがよい。大学の初年次にこうした作業を体験しておけば、後々、調査が苦にならなくなるだろう。

以上のような調査結果は、一連の授業の最後の時間に、岡山市役所職員、商工会議所まちづくり委員会メンバーなど外部の関係者を招き、学生により発表される。この際、学生は、調査方法の妥当性や結果の読み方について質問を受け、返答に窮することも多々ある。決して手抜き調査をしたわけではないが、教養教育科目の授業の一環として行う調査では不十分と成果の質と量に限界がある。

外部の方々は、それを承知の上で敢えて厳しく、深みのあるディスカッションを求める。それは、岡山大学の実践型社会連携教育を理解し、まちづくりを担う若者を育てるという点で、目的を共有しているからである。西川アゴラにおいて常々関係者とまちづくりの会合を重ねているからこそ、教育においても、このように地域との良好な関係を創り出せているのである。

図表5 「フィールド調査の基礎を学ぶ」授業様子 (左) 西川調査 (右) 成果発表会



#### 4. サテライト・キャンパスを活用した大学・地域協働の課題と展望

西川アゴラは、若者をはじめとする市民のまちづくりへの参画拠点であり、現場体験を重視した実践的な教育の場としても利用されている。その特徴は、様々な団体による参加型のサテライト・キャンパスとして、まちづくりの責任を共有し、単にパートナーシップに留まらず、新しい協働を生み出していくことである。たとえば、平成29年には、パフォーマーや沿道業者が中心となり、歩行者天国実行委員会が立ち上げられたが、これに岡山市や岡山大学も委員として名を連ねており、パークマネジメントやエアリアマネジメントへの取組に発展していった。

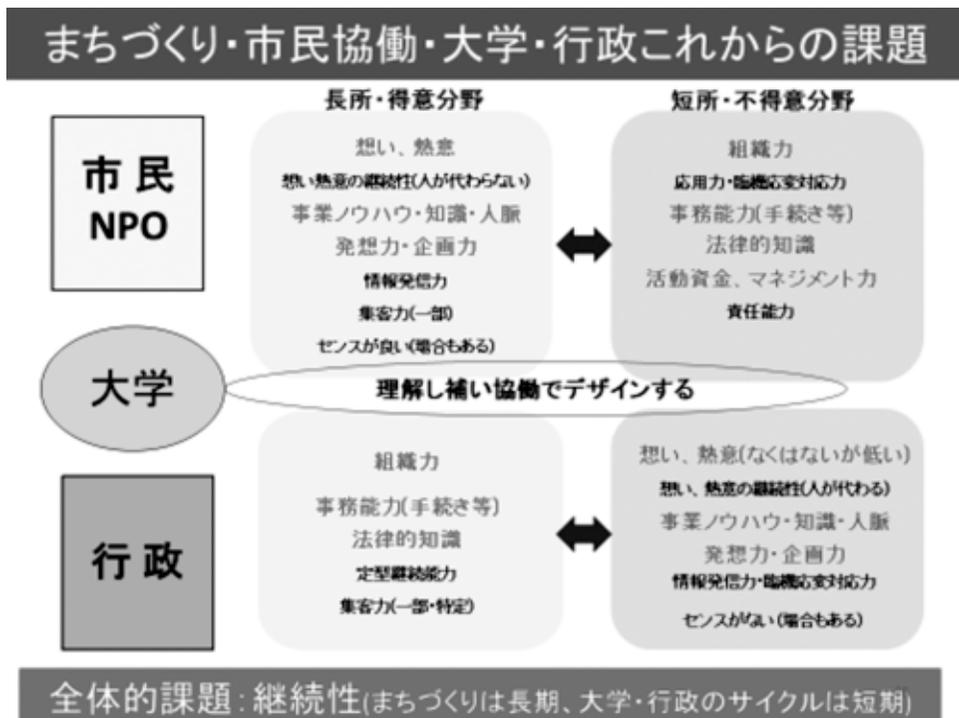
本稿は、西川アゴラの事例を通して、「大学と地域の協働のまちづくりは持続的に展開できるのか」、「サテライト・キャンパスは協働のまちづくりを行う上でどのような役割を果たすのか」ということを論じてきたのだが、大学と地域の協働には、日々の地道な運営の積み重ねと、人間関係の構築が不可欠である。サテライト・キャンパスの設置は、華々しさがあるが、日常的な運営は、労力がかかる上、地味であり、地域や市民団体と関係構築の時間をかける必要がある。

サテライト・キャンパスを展開していくということは、「大学が象牙の塔から抜け出し、教職員と学生がまちづくりを担う一員としての自覚を持たなければならない」ことを意味している。大学は、教員の知見や分析力、学生たちの斬新なアイデアを通じてまちづくりに貢献することができるはずである。

西川アゴラの課題には、運営と継続性の難しさが挙げられる。運営については、教員が大学外部から調査研究費を得て運営に充てているため、財政的な自立性が強くない。土日のイベント時には、

施設の施設など教員の負担が大きい。また、サテライト・キャンパスが長く運営されてくると、その存在が当たり前のものとなり、大学を含めた利用団体が運営に関わる人々への感謝の念を忘れがちになる傾向がある。加えて、リピーターはいるが利用者が固定化され、学内や地域に対して、認知度をさらに広めていくことが重要になってくる。肯定的にとらえるのであれば、サテライト・キャンパスの運営に手間がかかっているということは、大学と地域の接点も丁寧に維持されていることになり、大学生のまちへの浸透など、若者がまちづくりに参画する機会も創り出すことができているのである。継続性については、まちづくりには長期の活動が必要であるが、大学や行政の活動サイクルは短期の取組で終わりがちだという問題もある。市民やNPOは、まちづくりに対する思いが強く、ネットワークや発想力もあり、センスの良い企画を立ち上げることができるが、組織力、事務能力、活動資金、マネジメント力に弱い場合がある。一方で、行政は、組織力、事務能力、法的な知識は優れているが、人事異動が伴い、想いや熱意を継承することが容易ではなく、自由な発想も制限されてしまうことがある。その中で、大学は、市民と行政を繋ぐ協働のクッションとして役割を担っており、研究や教育の力によってまちづくりの質を高めていかなければならない。まちづくりの課題を分析することで、継続性の糸口も探すこともできるはずである。

図表6 まちづくり・市民協働・大学・行政の課題



## 5 おわりに

西川アゴラは、規模も予算も限られているため、全国のサテライト・キャンパスと比較するのは容易ではないが、運営スタッフが願っていることは、小回りが利いて、使いやすく、まちづくりの楽しさを体験できる場であって欲しいという点である。サテライト・キャンパスを活用した大学と地域連携というものは、それぞれのまちづくりに影響を受けやすいため地域的特性が現れやすいものであり、本稿では、その中にこそ、大学の教室だけではなく、若者が地域で学ぶ意味が含まれていると考えている。

まちづくりは日々変化を続けている。サテライト・キャンパスには、中塚と小田切が明らかにした①交流型、②価値発見型、③課題解決実践型、④知識共有型の4類型があり、市民、行政、そして大学は、様々な期待とニーズを有しながら、これらの活動に参画している。サテライト・キャンパスが、地域で活用され、発展していくためには、それぞれの持つまちづくりの実情に柔軟に対応し、大学の研究と教育力を発揮させることが肝要である。

## 参考文献

- 伊藤邦衛 (1988) 『公園の用と美』, 同朋舎.
- 伊藤真知子, 大歳恒彦, 小松隆二編著 (2007) 『大学地域論のフロンティア:大学まちづくりの展開』, 論創社.
- 岩淵泰 (2016) 「参加民主主義による公共空間の再生:岡山市西川緑道公園のまちづくり史」, 岡山大学経済学会雑誌47 (2), pp.277-301.
- 大西正志 [ほか] 編著 (2016) 『地域と連携する大学教育の挑戦:愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースの軌跡』, ペリカン社.
- 小林英嗣, 地域・大学連携まちづくり研究会 (2008) 『地域と大学の共創まちづくり』, 学芸出版社.
- 長崎県立大学編集委員会編 (2017) 『創る×まち 育てる×ひと:地域創造と大学』, 長崎新聞社.
- 中塚雅也, 小田切徳美 (2016) 「大学地域連携の実態と課題」, 農村計画学会誌35 (1), pp.6-11.
- 萩原誠 (2016) 『地域と大学:地方創生・地域再生の時代を迎えて』, 南方新社.
- 前田芳男 (2017) 「岡山市の西川緑道公園における市民主体のまちづくり活動」, 公園緑地78 (3), pp.24-27.
- 4 大学メディアキャンパス (長岡造形大学, 新潟青陵大学, 新潟薬科大学, 新潟青陵大学短期大学部) 『サテライトキャンパスサミット in NIIGATA2017』平成29年度報告書.